The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.23　学会の活動/会則/執筆要項
Author(s)	
Citation	大阪大学言語文化学. 2014, 23, p. 87-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学会の活動

2013年6月27日（木）　大阪大学言語文化学会第43回大会

（2013年度春季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）

＜研究発表＞

八野　幸子（言文）：英語理学療法論文における後置修飾―「人」を表す名詞と傷病名との関係性

森本　圭子（言文）：The Monitoring and Feedback on the Process of Language Acquisition - Ecomomics on the Process of Language Acquisition-

黒谷　茂宏（言社）：文法性と自然性―ドイツ語における名詞省略と名詞化形容詞（教育的立場から）―

大谷　友也（言文）：触覚に関する共感覚表現の再考

呉　　素汝（言文）：閩南系台湾人の使用言語選択における要因
―台北、台中、嘉義からみる―

小野　絵理（言社）：指示詞の選択基準
―現代中国語において発言内容を指示する場合―

ダリア・ヴィノグラードワ（言文）：古代文字（甲骨文・金文）における構成要素に関する一考察―現代漢字及び現代記号（アイコン）との対照比較を通して―

宮前　公美（言社）：モンゴル語の条件及び譲歩の表現形式について
―モンゴル語版『ソバシド』を取り上げて―

金　　泓槿（言社）：派独韓国人看護婦の派遣過程
―在独韓国人社会の黎明期（1957－1977）―

佐藤　晶子（言社）：占領期の公衆衛生―W.エドワーズ・デミングのSQC戦略が寄与した結核死亡率半減―

池坂　麻記（言社）：煽動劇『大地は逆立つ』と新しい試み―

＜総会＞

活動報告

委員改選

新委員：

植田晃次（委員長）、山本佳樹（副委員長）、井元秀剛（学会誌前半担当）、小

門典夫（学会誌後半担当）、田畑智司（春の大会運営担当）、小口一郎（秋の大会運営担当）、小川敦（書記）、中村静（事務局）、木山直毅、張若星、田玥、中尾朋子、潘寧

会計報告（後掲の通り）

2013年10月24日（木）　大阪大学言語文化学会第44回大会

（2013年度秋季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）

＜研究発表＞

洪　心怡（言文）：台湾人学習者に見られる促音語・非促音語の問題点

塩谷　尚子（言文）：日本語における「慰め」の様相
—大学学部生のアンケートを基に—

謝　佩真（言文）：台湾における大学英語教育マルチメディア教材のあり方について—共有・再利用の視点から—

与那覇恵子（言社）：米軍占領下の沖縄における英語教育　1945年～1953年「初等学校における必修の英語教育は何故継続し得なかったのか？」

池坂　麻記（言社）：悲劇からメロドラマへ変遷する1920年代前半のメイエルホリド作品

林　愛美（言社）：ケニアのマサイ社会における女性の通過儀礼の実践と変容

黒谷　茂宏（言社）：意志と意気込み—ドイツ語における1人称主語の未来時制—

牧野　友香（言社）：スワヒリ語における全体重複と部分重複について

中山　大輝（言社）：過去から現在へ紡がれるアフリカ系アメリカ人の継承の精神—King Hedley IIとRadio Golfを中心に—

平川　和（言社）：対話の可能性とメディアの呪縛—Don Delilloの*White Noise*—

江戸　智美（言社）：Recaptured Blues—August Wilson作品にみる文化遺産の奪還—

三宅　一平（言社）：語り得ぬものを語る
—Slaughterhouse Fiveにおけるレトリックとしての時間—

小野　絵理（言社）：中国語の文脈指示用法における指示詞の使い分けに相当する英語表現

張　若星（言文）：中国語の統語的なあいまい文の韻律特徴—中国語母語話者による生成実験および知覚実験による分析—

夏　麒（言社）：先天盲児視覚動詞概念獲得過程の研究
—中国語母語話者の場合—

2014年3月31日 『言語文化学』第23号 発行

＜査読者＞

秋田喜美、伊勢芳夫、王周明、大村敬一、越智正男、北村卓、木内良行、郡史郎、小門典夫、小杉世、坂内千里、佐藤彰、竹蓋順子、田畑智司、中直一、林良彦、早瀬尚子、三宅真紀、宮本陽一、村上スミス・アンドリュー、山下仁、山本佳樹、ヨコタ村上孝之、義永美央子、我田広之

《2012年度　大阪大学言語文化学会　会計報告》

（単位：円）

収　入		支　出	
予備費（前年度繰越金）	2,839,709	発送費 （「言語文化学21」等）	35,550
学会費・賛助金	759,000	郵送費 （発表会案内等）	13,190
バックナンバー	8,790	大会補助運営費	168,410
抜刷代	19,850	大会受付謝礼	15,000
大会補助運営費 （懇親会参加費）	79,000	事務局補助人件費	298,170
普通郵便貯金 （利息）	625	消耗品費	16,303
普通郵便貯金 （定期預金満額，利息含）	50,282	振込等手数料	920
		バックナンバー （郵送費）	580
		抜刷代	1,580
		普通郵便貯金 （定期預金満額）	50,000
		予備費 （次年度繰越金）	3,157,553
計	3,757,256	計	3,757,256

（平成25年3月31日 現在）

大阪大学言語文化学会会則

第１条　本会は大阪大学言語文化学会と称する。

第２条　本会の会員は次の２種とする。

1. 通常会員　大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻の教員、大学院学生、大学院修了者（言語文化学専攻の修了者も含む）で所定の会費を納めたもの。
2. 特別会員　元教員及び本会にとくに貢献したもの。

第３条　本会は会員の学術研究を促進するとともに、研究成果の普及をはかり、広く学術全般の進展に寄与することを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために研究会を開催し、機関誌を発行する。

第５条　本会の会員は機関誌の配布を受ける。

第６条　本会は第３条の目的を達成するために年１回、言語文化学会総会を開催する。

第７条　本会に次の役員をおく。

1. 会長及び委員、監事をおく。
2. 会長を言語文化専攻長、副会長を副専攻長とする。
3. 委員は原則として教員より８名、大学院学生より５名を選出する。なお、別に事務担当をおくことができる。
4. 監事は２名とし、会計の監査にあたる。監事は会長が委嘱する。

第８条　本会に委員会をおく。

1. 委員は前条３の委員をもって構成する。
2. 委員会に委員の互選による委員長、企画・編集委員（若干名）、会計委員（若干名）をおく。
3. 委員会は本会の運営にあたる。

第９条　役員の任期は次の通りとする。

1. 会長及び副会長の任期は言語文化専攻長及び言語文化副専攻長の任期に従う。
2. 委員の任期は１年とする。
3. 監事の任期は１年とする。

第10条　本会の経費は会員の会費及びその他の収入による。

1. 会費は付則の定めるところによる。
2. 本会の会計年度は４月より翌年３月までとする。

第 11 条 本会の事務局は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻内におく。

付則　1. 通常会員は会費として年間 3000 円を納める。

2. この会則の改正は、総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛同を必要とする。

3. 本会則は平成 3 年 5 月 8 日より発効する。

平成 19 年 10 月 25 日改定

『大阪大学言語文化学』執筆要項

1.「論文」または「研究ノート」について

本文の言語が日本語か日本語以外かによって提出するファイルが異なるため、下の表で確認すること。

電子媒体のファイルのみ、事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）宛の電子メールに添付して提出すること。

＜提出ファイル（本文が日本語）＞

番号	種類	ファイル名	内容（矢印の順に頁立てすること）
1	Word	jltookoo_yourname.doc	表紙 → 要旨 A → 要旨 B → 本文
2	PDF	jltookoo_yourname.pdf	（表紙は不要）要旨 A → 要旨 B → 本文
3	excel	count_yourname.exls	（ホームページからダウンロード）

＜提出ファイル（本文が日本語以外）＞

番号	種類	提出ファイル名	内容（矢印の順に頁立てすること）
4	Word	jltookoo_yourname.doc	表紙 → 要旨 A → 本文
5	PDF	jltookoo_yourname.pdf	（表紙は不要）要旨 A → 本文
6	excel	count_yourname.exls	（ホームページからダウンロード）

＜注意点（共通）＞

ファイル名等	表中の提出ファイル名とし、「yourname」を各自の氏名（「tanakaminoru」や「johnsmith」等）に置き換えたものに変更すること。 ＊番号２・５の PDF ファイルについては、本表下に示す方法等により作成者情報を削除した上で提出すること。
用紙	A4 サイズ、横書き
ページ番号	本文だけに付ける。
本文	和文または欧文に限る。 和文原稿：40 字× 30 行（タイトル、本文・脚注とも 11 ポイント） 欧文原稿：30 行（タイトル、本文・脚注とも 12 ポイント） ＊文字間、行間を狭めることはできない。 ＊引用文のポイント数を落とすことはできない。

＊ PDF 書類作成時の注意

PDF ファイル本体、ファイルのプロパティのいずれにも著者情報が書き込まれないよう注意すること。

・PDF ファイル作成時に「作成者」の欄に名前が入っている場合は消しておくこと。（図 1 は Mac OS X 環境の場合）

・Adobe Acrobat で PDF ファイルを開き，プロパティを確認する（図 2、3 ＊いずれも Mac OS X 環境）。

図 1　PDF 書類作成時の確認画面（Mac OS X 環境）

図 2　Adobe Acrobat でのプロパティの確認（1）

図３　Adobe Acrobat でのプロパティの確認（2）

(1) 表紙：

表紙ページに以下のように記入すること（[ ] 内は説明）。

論文の題名［本文と同じ言語］*［半角アステリスクを１つ付ける］
［1 行あける］
執筆者氏名［本文と同じ言語］**［半角アステリスクを２つ付ける］
［1 行あける］
キーワード３語［本文と同じ言語］
［3 行あける］

*［半角アステリスク１つと、半角スペース］ 論文の題名［本文と異なる言語］(執筆者氏名)［丸かっこをつける。本文と異なる言語で。非ローマ字言語の場合は、ローマ字表記も付記する］
［1 行あける］
**［半角アステリスク２つと、半角スペース］ 執筆者の所属［日本語で書く］

・タイトルとサブタイトルのつなぎ方、スペース、大文字と小文字の区別等は、以下の例にあわせること（論文名等は『言語文化学』Vol.12 から引用）。

—論文題名の書き方—

（日本語、中国語などの場合）

フランス語化政策とマイノリティー

—ケベック州移民統合政策の縮図としての中国系移民—

（英語の場合）

An Unweeded Garden That Grows to Rhyme:

The Relationship between William Shenstone' s Gardening and His Poetics

英語の場合は、タイトル、サブタイトルの最初の語の先頭を必ず大文字にする。それ以外の語も、冠詞、前置詞、等位接続詞、不定詞の to を除いて、大文字で始める。（それ以外の言語は、それぞれの慣例に従うこと）

—氏名の書き方—

（日本語例）言文　太郎

（朝鮮語例）겐분 다로（GENBUN Taro），김민호（KIM Minho）

［朝鮮名・中国名の場合は、姓名を分かち書きしないこと。］

（中国語例）胡　琳（HU Lin）［ローマ字表記は日本語読み（KO Rin）等でも可。］

（英語例１）GENBUN Taro［姓（全大文字）＋名前（先頭だけ大文字）］

（英語例２）Taro GENBUN［名前（先頭だけ大文字）＋姓（全大文字）］

（ロシア語例）ИВАНОВА Мария（IVANOVA Mariya）［ローマ字表記も付けること。］

—所属の書き方（必ず日本語で）—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程（学生の場合）

大阪大学言語文化研究科（常勤教員の場合）

大阪大学非常勤講師（非常勤講師の場合）　　など

—キーワードの書き方—

（日本語例）キーワード：ホテル、都市メディア、消費文化

（英語例）Keywords: *ut pictura poesis*, the garden-poetic relationship, Thomas Percy's ballads

(2) 論文要旨　(A)

日本語で 1,000 字以内。冒頭に「論文要旨（A）」と書き、日本語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(3) **論文要旨　(B)**

本文を日本語で執筆した場合のみ、提出が必要。

日本語以外の言語で書く。欧文の場合は400ワード以内。中国語、朝鮮語の場合は1,000字以内。冒頭に「論文要旨（B)」と書き、要旨（B）と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(4) **本文**

(a) 執筆言語

日本語、英語、独語、仏語のいずれかの言語で執筆することが可能である。但し、英語、独語、仏語のネイティブスピーカーは、母語以外の言語を選択すること。

(b) 原稿の長さ、字数

「論文」和文ではA4用紙13枚以内、欧文ではA4用紙18枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。かつ、本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で13,000字以内、欧文で5,000ワード以内とする。なお、半角・英数は0.5文字と数えること。

「研究ノート」和文ではA4用紙10枚以内、欧文ではA4用紙15枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で9,000字以内、欧文で4,000ワード以内とする。執筆者は原稿提出の際、言語文化学会ホームページより「文字カウント表」をダウンロードし、書式に従って字数を申告する。

(c) 書式設定

余白は上35mm、下30mm、左30mm、右30mmに設定する。

(d) 冒頭に本文と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(e) 章・節番号

「0」ではなく「1」から始めること。漢数字表記は認めない。

―章・節番号の書き方―

1（半角スペース）セクション題名（「1.」「1章」「Ⅰ」などとしない）

1.1(半角スペース)サブセクション題名(ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1」「1.1.」とはしない)

1.1.1（半角スペース）サブサブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペ

ース。「1.1.1」「1. 1. 1.」とはしない)

(f) 和文中の句読点「。」と「、」を用いる。

(g) 数字表記

横書きであることを考え、原則としてアラビア数字を用いる。アラビア数字は半角で入力する。

(h) 文字修飾

網掛けは希望通りの濃さに印字されない可能性があるので、使用しないこと。過度な文字装飾は避けること。

(i) 例文番号

例文の先頭に (1)、(2)、(3) などの丸かっこ付きの番号を用いる。下位区分には、a.、b.、c. を用いる。

— 例 —

(1)　東京に行った。

(2) a. *田中さんに行った。

　b.　田中さんのところに行った。

(j) 図表

図表には番号と図表名を本文と同じフォントサイズで付ける。図表中の文字のサイズは原則として 9 ポイント以上とする。

(k) 参考文献・引用文献の表記

参考文献の一覧は本文の後につける。下記の例を参考にすること。

— 日本語文献例 —

著者名『著書名』発行元、発行年。

著者名「論文名」『掲載誌名』巻号数、発行元（発行団体)、発行年、pp.1-16。

著者名（発行年）『著書名』発行元、発行年。

外国語文献の場合は、それぞれの言語の慣例に従うこと。

(l) 注

注は通し番号をつけて頁末脚注とする。注のフォントサイズは、本文と同じとする。本文中の注番号としては、「これは例文です[1]。」のような上付き文字を用いる。

(m) 謝辞

査読に不都合があるので、応募時には謝辞を書かない。採用決定後は短い謝辞を記載してもよい。

(n) その他

査読に不都合があるので、応募時には本文、または注釈に投稿者の匿名性を損なう事柄を書き込まない。自分の過去の学会発表、論文に基づいて本論文を執筆する場合、20XX 年の発表に基づいている等を書くのは良いが、発表者名は採用決定後に書くこと。

2.「書評」および「図書紹介」について

どちらも和文で A4 用紙 4 枚以内（4,000 字以内に）、欧文で A4 用紙 7 枚以内（1,800 ワード以内に）。「図書紹介」は、当該度出版または出版予定で、筆者自身が執筆または編集に携わった図書の紹介記事とする。「書評」は、それ以外の図書を対象とする。

用紙は A4 サイズで、横書きとする。和文原稿の場合は、11 ポイントで 40 字 ×30 行、欧文の原稿の場合、12 ポイントで 30 行とする。提出方法、その他の規則は論文、研究ノートに準じる。提出原稿の形式は以下の通り。

(1) 1 枚目：書評者名、書評の対象となる本の書名
(2) 2 枚目以降：書評の対象となる本の書名、著者、出版社、（出版地、）出版年度、ISBN、本文

3. その他

＜原稿の種類変更＞　一度提出された原稿の種類（論文、研究ノート）は、原則として変更できない。

＜投稿内容の変更＞　投稿希望時の論文タイトルと比べて、内容が大きく異なる原稿を投稿することはできない。

＜ネイティヴ・チェック＞　本文、論文要旨とも、母語以外で書かれた部分については、かならずネイティヴ・チェックを受けてから提出すること。文章力が著しく劣る場合は内容の如何にかかわらず不採用となることがある。

＜第三者のチェック＞　一定の水準で査読が行われるために、執筆者は事前に読み合わせを行うなど、投稿前に第三者に目を通してもらうことが望ましい

＜無断引用・剽窃＞　引用箇所については、出典をはっきりと示すこと。査読段階で盗用・剽窃が指摘された場合、不採用とする場合がある。

その他執筆に関して不明な点があれば、大阪大学言語文化学会事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）まで問い合わせること。